

健康文化

竹藪

今井田 二三子

藪医竹子のランドマークではないのですが私の処は母家の敷地に続いて竹藪が広がっています。それは写真で見ると青竹が亭亭と天をつき、根本は綺麗に掃き整えられた竹林ではなく、枯れ竹が縦横斜めに倒れ、根本には枯れ笹葉が堆積し、雑草は蔓延し妖怪でも現れそうな気配をただよわせています。それでも土地の開発で住み家を失った鳥達の都合のよい宿になっているようです。鳴き声の異なる場所から二つの鳥のグループ、雀、椋鳥などが常連のようです。去年の暮れには椋鳥の大集団が訪れ、定宿にしていた雀たちを追い出し、厚かましい鳥までが遠慮して鳴き声をひそめていた様子でした。ねぐらに帰る前のひととき電線上に集まった椋鳥のさえずりもかなり喧しいのですが、ねぐらに帰った後も寝る場所の争い、中には昼間の話の続きが終わらないのか終夜竹藪の中はざわめいていました。

以前は梟の家族が住んでいたこともありましたが、或る日、子梟が木から落ちて飛び立てないのを私が見つけて枝に返すため捕らえようとしたところ、子梟はあの丸い目で私を見上げながら恐怖の面差しでかなり速い足どりでトコトコ逃げ出しました。そして助けを呼ぶのでしょうか、恐怖の鳴き声でしょうかカタカタという音を発しますと、何処かでそれを聞きつけて羽を伸ばすと1メートルもあろうかと思われる親梟が両脚を伸ばして私をめぐらして襲いかかってきたではありませんか。今度はこちらがびっくり仰天し一目散に家の中に逃げ込みました。その時から梟は昼間でもかなりものが見えるのだと思うようになりました。そのことがあってから、此処は安心して子育てができないと思っのか梟の家族は竹藪から姿を消しました。そして今度は雉子のファミリーがやってきました。雉子は全く大らかな天性を持っているのか、春毎に姿を現す度に警戒心が薄れるようで、家長の雉子太郎などは残していった奥さん雉子と呼ぶのに大きな声でケーン、ケーンと鳴きながら稲の切り株だけの田の中を西に東にトコトコと走り回っていました。周囲に捨て猫のノラセゴンがいるのを心配

して「雉子太郎一、早く叢へ姿をけすのよー」と叫ぶと、声に驚いて低空飛行で叢までは飛んでゆきますが半分草の陰から体を出したまま首をもたげてこちらを眺めています。何処からともなく現れた奥さん雉子も全くのんきで雛を一列縦隊に並ばせ車も通る畠中の道を横切って見る者の気をもませていましたが、今は野良猫に襲われるのかここ数年間は雛の姿を見ていません。お隣さんの話ですと、畠の草の中で卵を抱いているようです。警戒心のないのが災いしたのかまた天寿を全うしたのか、雉子太郎は一昨年か或る朝私の処の門の前で冷たくなっているのを見つけました。私はこの土地が好きであったように思えた雉子太郎がいとおしくて、その緑の羽を撫でながら竹藪の私の所で最後に飼った犬の眠っている隣りに葬ってやりました。最後に飼った犬のココは臆病で、成犬になってからは散歩に連れ出そうとしても道路に出る前に立ち止まって歩こうとしません。やっと歩き出しても前方から犬が近づいてきても人が近づいてきてもまた座り込んで動こうとしないため、やむなく抱えあげて犬の散歩でなく人間の散歩をさせられることが度々でした。その隣りに眠っているのが猫のチビです。これはココと違って身勝手に腹の空いたとき、魚の臭いのするときと怪我か病気の時以外は近づいてきません。そのチビが長いこと家出をしていた後、首と脚に大怪我をし、それが化膿し、瀕死の状態か或る日帰ってきました。そして二、三日後ホーム炬燵の私達の側で静かに息をひきとりました。

フト、もし私がいつか天上界に行くことができたなら雉子太郎やココやチビは喜んで出迎えてくれるだろうかと思うことがあります。犬、猿、雉子でなく犬、猫、雉子を共に連れて雲上を散策する姿を想像すると楽しくなることがあります。しかしこのお供はあまり藪医竹子の役には立たず犬は見知らぬ動物に出会えば私の腕の中に飛び込み、猫は呼んでも素知らぬ顔、そして雉子は前後左右に走り回り私をハラハラさせることでしょう。

そんな私の思いは我関せずかのように竹藪は今日もサラサラ、ザワザワ葉ずれの音を立てながら鳥達にねぐらの用意のできたのを告げているようです。

(内科開業医)